

感想の記入にご協力ください。



SCAN ME

# **About My Interests**

**Ancient Greek Philosophy**

**Akira Arakane, (14:45 - 15:30) Monday 16 January 2023**

# 最近考えていること

## 1 未来

- 現代英米哲学 古代ギリシャ哲学 両者の融合したところに、アトランティスが開けるのではないか。
- 科学的・分析的思考によって啓蒙された諸国に、ギリシャの精神的文明性が加われば、高貴な未来を実現することができるのではないか。
- 時代は哲学を必要としており、かつその素材はすでに古代で示されているため、時代が必要とするのは古代の伝承者である。

# 最近考えていること

## 2 古典世界への誘い

- 古代ギリシャは豊かである。
- この教室には、哲学に魅力を感じて進路選択をした者が少なからずいると思う。哲学にどのようなものを期待してここに来たのか。
- 哲学科に来て、進路選択を誤ったと後悔する者があるかもしれない。しかし、生きた学問を求める愛智、その純粋な心の奥底の動機だけは決して間違っていなかったのではないか。
- 大学教育における哲学は死んでいる。期待していたほど楽しくない。もしこのように考える人がいたら、その人は一度古代に来たらよいのではないか。
- プラトンの対話篇は生きている。近現代の哲学に物足りなさや無味乾燥さを覚える人は、一度古代に来れ。

# 最近考えていること

## 3 古代ギリシャ世界は多様な傑人を擁せり

- メソポタミア文明とエジプト文明の交差点、ローマへの橋渡し
  - ソロン、タレス、ピュタゴラス、パルメニデス、アナクサゴラス、デモクリトス、ソフィストたち、ソクラテス、プラトン、アリストテレス
- ホメーロス、ヘーシオドス
- アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデス、アリストパネス
- ヘロドトス、トゥキュディデス
- 入門書ではなく、直接原典邦訳に当たることをおすすめる。

# 最近考えていること

## 4 私が現代に訴えたいこと

- 私の目標は、科学による批判を受けてより精緻な領域に達したもののとして、**敬虔さ**を現代の人々に勧めること。
- 私は人々に対して、**心的事物の存在を承認すること**を推奨する。
- 換言すると、**心的事柄が私にとって一大事であり、それらが実際に私に関わって影響直を与えており、人生を大きく左右するものであると信じていることを勧める。**

# 最近考えていること

## 4 心的事物の实在の承認の説得（幸福論經由での試み）

- 世界が物体だけでできていると考え、心的事物は物体の上に成り立つ虚構でしかないと考えこれを軽視するから、人々は幸福を見逃すのではないか。
- [大陸哲学的説得] 環境から我々が所動的に受け取るところの現象は心によって理解され、環境へと我々が能動的に介入するところの行為は心から発するものである。この要である心を蔑ろにするならば、我々はよく生きることができないであろう、というのはいかにもありそうなことではないか。
- [英米哲学的説得] 心的事物が虚構ではなく個別に实在して我々に対し影響力を持つという、観念实在仮説（イデア論？）は、人間の行為と判断をうまく説明できる。またその仮説を採用することによって我々はよく生きることができる。すなわち実用主義的観点からも有用な仮説である。
- しかし「幸福になれない」ということを望まない帰結と捉え、帰謬法的に論じる上の論法は、完成されたものではないと考えている。というのも、人は幸福になるために何かの实在を認めるのではないから（幸福な人の考えていることが正しい、と人は認めないだろうから）。



# 最近考えていること

## 4 心的事物の实在の承認の説得（有神論経由での試み）

- 物と神が同様に有る、というのではない有神論がありうる。
- 有神論にとって最も脅威的な言説は以下のものであると思う。「神は、その非存在（無為）によって世界を最もよく統治するかのごとし」「神は人々の間に宗教を求めず」
- 上の論争があるから、私は、信仰の有無を問わず「敬虔であること」（心的事柄が私にとって一大事であり、人生を大きく左右するものであると信じていること）の説得にあたろうと思う。
- 敬虔であれということだけは、より多くの人々を論理的に説得でき、かつ破壊的宗教が陥るような惨状も回避され、また神が実在するとしてもその神は、信仰を持たずとも敬虔なる人を冷遇することはなかるうから。



# 最近考えていること

## 5 敬虔さ 心的事柄が私にとって一大事であり...と信じていること

- 人は、日々の生活が私にとって一大事であり、人生を大きく左右するものであると信じるなら、日々の生活を支える何らかの労働に腐心するであろう。これは敬虔さとは呼ばない。
- 人は、容姿、衣服、および装飾品が私にとって一大事であり、人生を大きく左右するものであると信じるなら、それらを得ることに腐心するであろう。これを虚栄と呼ぶ。なぜ虚であるかということ、それらの品々はあなたの外部にあってあなた自身を立派にするものではないから。
- 人は、心的事柄が私にとって一大事であり、人生を大きく左右するものであると信じるなら、それらが損なわれるときに私自身もまた損なわれると信じて、自分の思いと言葉と行いが善美にかなって真正であることを得るために、自身の心の吟味に腐心するであろう。これを敬虔さと呼ぶ。

(\*)労働について 相手の分を侵す金銭獲得を目的とする働きには不正が、相手の分を守る公共利益を目的とする働きには自己否定が、マズロー的自己実現を目的とする働きには勤勉さが、それぞれ必然的に伴う。

不正・自己否定・勤勉さのいずれも、敬虔さとは異なる。一般的労働者は、前二者あるいは後二者の中間にある。

# 旧約聖書 コヘレト(ソロモン王)の言葉

## エルサレムの王、ダビデの子、コヘレトの言葉。(1:1)新共同訳

- コヘレトは言う。なんという空しさなんという空しさ、すべては空しい。太陽の下、人は労苦するがすべての労苦も何になるう。(1:2-3)
- わたしの心は何事も知恵に聞こうとする。しかしなお、この天の下に生きる短い一生の間、何をすれば人の子らは幸福になるのかを見極めるまで、酒で肉体を刺激し、愚行に身を任せてみようと心に定めた。(2:3)
- . . .
- 青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。苦しみの日々が来ないうちに。「年を重ねることに喜びはない」と言う年齢にならないうちに。(12:1)
- コヘレトは知恵を深めるにつれて、より良く民を教え、知識を与えた。多くの格言を吟味し、研究し、編集した。コヘレトは望ましい語句を探し求め、真理の言葉を忠実に記録しようとした。賢者の言葉はすべて、突き棒や釘。ただひとりの牧者に由来し、収集家が編集した。それらよりもなお、わが子よ、心せよ。書物はいくら記してもきりが無い。学びすぎれば体が疲れる。すべてに耳を傾けて得た結論。「神を畏れ、その戒めを守れ。」これこそ、人間のすべて。神は、善をも悪をも一切の業を、隠れたこともすべて裁きの座に引き出されるであろう。(12:12-14)

# **Theaetetus**

**Plato**

**Akira Arakane, (14:45 - 15:30) Monday 16 January 2023**

# Prologue

プラトンの著作は、哲学的に重要な**話題に**（結論にではなく）富んでいる。

- 『テアイテトス』プラトン著。副題「知識について」。ソクラテスとテアイテトス（**幾何学徒**）、テオドロス（**幾何学者**）との対話。
- 現代社会の分断問題、授業内で扱った相対主義・絶対主義の問題 これらに関係するものとして、『テアイテトス』という選択は適切であった。
- 翻訳は岩波文庫版田中美知太郎訳(1966)、原典はBurnet版(1903)を基本としつつ、要約あるいは強調の必要があると思われる箇所は改めた。

# 『テアイテトス』

それによって知者にならないところのものは、知ではない

- 145D 「今「学ぶ」ということを言ったが、これはそもそもその学ぶ事柄に関して一段と知者になることではないのか。」 「ところで、この知者が知者であるのは、何はさておき、知があるからだと思うのだが。」
- 当たり前と思われることが確認されているのだが、しばしば我々はこれとは別の思いなしをしてしまうものである。その代表例が「授業に出て、本を読み、多く言葉を使った。だから私は学んだ。」



# 『テアイテトス』

## 哲学・学問の心構え 共感と批判的知識追求の区別

- 149A 「（人は言う）「実に変な奴だ、あいつのすることはといえば、ただ人間を行き詰まらせ困惑させるだけのことなんだ。」」
- 150B-C 「僕たちの技術（ソクラテ斯的対話術）は...青年が思考を動かして分娩したところのものが似非物や偽物であるか、それとも正物であり真物であるかを検査することができる。」
- 151C 「もし万一君の言うことで、偽物であって真物ではないと考えられることがあって、結果それを僕が取り出して**投げ捨てる**ということがあるかも知れないが、その場合に、まるで初産の者がその子供についてするような狂態は演じてくれたもうな。（中略）僕は好意でそれをしているのだ。」
- 151D 「偽物をそのままにしておいて、真物をくらますということは、断じて僕に許されてはいないということが、彼らにはなかなか分からないからなんだ。」



# 『テアイテトス』

知識とは感覚であるか。

- 151E テアイテトス 「何かを知識している人は、知識しているそのものを感覚しているものなのです。（中略）すなわち、知識は感覚にほかなりません。」
- 152A 「君が知識について語ったのは、まことに容易ならぬ説のようだ。プロタゴラスの説がそれらしいのでね。... 「あらゆるものの尺度であるのは人間である。あるものについてはあるということの、あらぬものについてはあらぬということの。」」

# 『テアイテトス』

知識感覚説は、相対主義と論理的に同値である。

- 152A 「彼の言おうとしているのはこのようなことではないのか。おのおののものが何らかの状態で僕に現れている場合、そのものは僕にとってそのようなものとしてあり、また君に何らかの状態で現れているならば、それはまた君にとってそのようなものとしてあるというのではないか。」
- 知識感覚説は、相対主義、万物流転説と表裏一体である。（あらゆるものは流れるごとく動いており、感覚がその都度変わるごとく、知識も変わる。）
- 152D-E 「何ものもいかなるときにもあるということはないので、終始なるというのである。...この点についてはパルメニデスを除く全ての知者、すなわちプロタゴラス、ヘラクレイトス、エンペドクレス、ホメロスが同じ歩調をとっている。」
- ソクラテス以降の知者も、少なくともホッブズは知識を身体的感覚を基盤とするものであるとするし、現代の自然科学者の大半も、知識を何らかの脳内電気信号なる身体的なものとして理解するであろう。知識感覚説はまことに容易ならぬ言論である。

# 『テアイテトス』

## 知識感覚説の吟味（要約論） ※これは結論ではなく、後に議論が続く

- 僕にとっては冷たくても君にとっては熱い、健康な僕にとっては甘美でも病気の僕にとっては不味い、というようなことがあるだろう。感覚で論じる世界ではそのようなことが起こるのだ。ところで仮に知識が一種の感覚であるならば、僕にとっては知識であって君にとって知識ではないということが起こるということになる。
- そうすると、君が何か病気にかかったときに、君の知識にではなく医者知識に頼ったり、あるいは君が家を建てるときに、君の知識にではなく大工の知識に頼ったるするというのは、どういうわけなのだろうか。なぜ万人が、豚やヒヒや蛙やオタマジャクシ、あらゆる感覚者が、知者ではないのか。
- 専門家（その領域の知者）の知識に頼るというのは、知識が感覚の一種ではないということに、我々が我々自身の行為によって同意していることと、何ら変わらないのではなからうか。

# 『テアイテトス』

## 知識感覚説の吟味（厳密論）

- 原文では、生成消滅論の、トートロジーにも等しい根底的同意事項「**なることは、なることによってでしか、ならない**」「もし何物かが何かに似るようになってたり似ないようになってたりするということが起こるとしたら、**類似(homoion)**になりゆくことによってそれは類似になりゆき、**非類似(anomoion)**になりゆくことによってそれは非類似になりゆく」（159A）から、議論を起こしている。
- 157D 「それでは、もう一度繰り返すが、**ある(einai)**なんてことはちっともなく、善でも美でも、...いつもただ**なりゆく(gignesthai)**のみということは、君に結構だと思われるか、言ってみてくれたまえ。」分からなくなったところでもう一度繰り返してくれるのもプラトンの魅力。



# 『テアイテトス』

知識感覚説から帰結するのは、謙虚さとは対極にある傲慢さである。

- 160C 「従って、僕の感覚というのは僕にとって真なのだ。なぜなら、それはいついかなる場合でも僕にとってのあるものの部分だから。すなわち僕は、プロタゴラスの言う通り、僕にとってあるもの・あらぬものの、あるということ・あらぬということの判定者（尺度）なのだ。」
- 160D 「それならば、虚偽を知らぬ者であり、思考上あるものとなるものについて躓くことのないはずの者である僕が、いやしくも何かを感覚する者としてある限り、まさにそのものについてはどうして知識するものでないということがあり得ようか。」

# 『テアイテトス』

## プロタゴラス風刺

- 161C 「なぜプロタゴラスは『真理』（著書）のはじめに、万物の尺度として、豚とか狒々とか、あるいはもっと奇怪なものの名前を、およそ感覚を有するもののうちから挙げることをしなかったのでしょうか。...彼はそうすることによって「諸君は私を知者だと言って驚いてくださる。しかしご覧、自分はまさに人間のうちの他の誰かはおるか、蛙の子のオタマジャクシに比べてみても、ちっとも知恵の優れたものではないのだ」ということを皮肉を効かせて証明できたでしょうに。」



# 『テアイテトス』

## プロタゴラス風刺

- 161D-E 「人が作用を受けて、そこに受け取られたものを判断するのに他人の方がうまいというようなこともなければ、（中略）そこに思いなされていることは皆ことごとく正しいのであり、真なのであるうならば、ここだけの話、一体なぜプロタゴラスは知者だったのでしょうか。...我々は各人各自の知恵の尺度であるにも関わらず、なぜ学知の劣る者として彼のもとに出入りして教えを受けなければならなかったのでしょうか。」
- ここにきて『真理』という書物の名が何か滑稽なものに聞こえてきはしないか。プロタゴラスが喜劇作家ではなく知者として『真理』を真理として書いたのだとしたら、疑いもなくそれは途方もない空談ということになるだろう、とソクラテスは続ける。

# 『テアイテトス』

## プロタゴラスの再評価

- プロタゴラスが何か意味のあることを、冗談ではなくまさに著書の題名の通り真理を、語っているのだとしたら、「尺度」という言葉について何か別様の解釈をしなければならないだろうということも、ソクラテスは言っている。必ずしも皮肉一辺倒ではない。
- 要は、万物流転説、人間尺度説、相対主義は一般に理解されているよりももっと奥の深いものであるかもしれないという可能性を、ソクラテスは捨てていない。

# 『テアイテトス』

## 相対主義論駁の批判、相対主義の再検討

- 162D テアイテトス 「「おのおのに思われているそのことは、かく思われているその者にとって、またありもする」という説は、彼らによって言われている様を検討していたうちはまったくよく言われているように思われたましたが、今はたちまちその反対に変わってしまいました。」
- ソクラテス 「それは君が若いからだよ。若いからこそ、俗受けを主眼とする議論にすぐに耳を貸し、その気になれるんだ。プロタゴラスならこう言うだろう。「諸君はみな生まれも立派な者たちである。しかし君たちがここに集まって何をしておられるのかと思えば、君たちは、神々とか、人間と家畜の間に何ら知恵において差がないのはけしからんとか、そういう俗耳に訴えるような議論しかしていない。必然的にそうならねばならないという証明を一切していない。証明抜きにまことしやかな言説だけをもって知を追求するならば、それらは幾何学者の前には藁一本の値打ちすらないのだ。だから君たちはよく考えてみなければならない、知識という重大な事柄について、その言論がまことしやかなものを用いて人を説得する手段にでたという類のものであるなら、諸君はこれを是認するのがふさわしいか否かということ。」」

# 『テアイテトス』

知識は感覚であるかという議論は再び振り出しに戻る。

- 163B 「我々が何かを感覚している時に、同時にまた何かを知識しているとするべきであろうか。例えば、外国人がものを言っている時に、我々は彼の音声を聴いているということは肯定するけれども、理解しているということは否定するだろうか。」
- 163D 「何者かが何かを学知した後、それを思い出すとしたら、その人はそれを思い出しはするけれども、それを知っていないということがあるだろうか。」
- 感覚と知識は同時に生じないことがある、ということを両節で言いたいようである。

# 『テアイテトス』

## 目を閉じてても知識は保持されるということから何が帰結するか

- 163E 「人は何かかつて見たものを思い出すことがあるだろう。」 「そして、目を閉じてても記憶が消えてしまうわけではないだろう。」
- 164A-B 「仮に視覚が感覚であり、感覚が知識であるならば、視覚がないときには知識もないことになる。故に、我々は目を閉じ耳を塞ぎ一才の感覚から離れている時に、知識も持たないことになる。しかしこのようなことは奇怪であろう。」
- 164E しかしこれも詭弁であることが判明し、没となる。「慣用の言葉遣いの注意を怠ると、我々は容易でないことにまで同意してしまうであろう。」

# 『テアイテトス』

## 排中律からはじめる

- 164E 知識追求のためには、時に敵方の議論にも味方せねばならない。
- 165B 「ひとが何かを知っているとして、その同じ人が、その知っている当のものを、知っていて知らないということが果たしてありうるだろうか。」
- 165B 「感覚が知識であると主張する人は、これと同じことを言っているのだ。」（感覚知識説論者は、感覚がないときにも知識は思い出されるものであるという主張と、感覚が知識であるという主張を、同時にすることによって排中律を否定している。）しかしこの論駁もソクラテス自身によって直後に棄却される。



# 『テアイテトス』

## 仮想プロタゴラス

- 165D 「知識には、感覚と同じように、程度の差がありうるだろうか。すなわち、同一のことがはっきり見たりぼんやり見たり、遠くから見えなかったり近くから見えたりするのと同じように、同一のことをはっきり知識したりぼんやり知識したり、遠くからは知らないけれど近くからなら知ることである。」
- これも仮想プロタゴラスに論駁される。（かつて知識しなかったけれども、のちに知識するようになることがない、ということに人は同意しないだろう。また、記憶が、記憶されたときと全く同じ状態で保持されるということにも同意しないだろう。ところがあなたの反論はこれら同意の上に成り立っている。）

# 『テアイテトス』

## 仮想プロタゴラス

- 166C-167D 「プロタゴラスならきっとこう言うだろう。ソクラテス、君はもっと品位のあるやり方をしてみてはどうだ。すなわち、ある考えを保持する人間を論駁するのではなく、考えそのものを論駁してみてはどうか。...個別になるところの感覚は他人と一致する場合があるとか、**病体の者の感覚を健康体の者の感覚に一致させる**者が知者であるとか、**虚偽を思いなす者はいなが思いなしの益害はある**とか、そういう議論を私は用意しているのだ。」

# 『テアイテトス』

## 哲学・学問には時間が必要である

- これ以降の議論は、時間が足りないため、ここで紹介することはできない。
- 172D-E 「今のべた知恵の探求者たちには、あなたの言われたあのもの、すなわち時間の余裕が不断に備わっていて（中略）彼らはただ真実のあるところのものにぶつかりさえすればいいんで、その話が長くなるか、それとも短くて済むかなんてことには頓着しないんです。ところが、もう一方の人たちはというと、水時計の流水にせきたてられるものだから、いつでもせわしない議論をすることになるのです。」

# 『テアイテトス』

## その後の議論

- 知識は感覚ではない。
- 知識は真なる思いなし（真なる信念）ではない。
- 知識は真なる思いなしに言論が加わったもの（正当化された真なる信念）ではない。
- 『テアイテトス』の前半分以上が、第一の問い（知識とは感覚であるか）に割かれている。それは、歴史上多くの知者がこの立場を支持してきたのであり、決してつまらないものではなく、慎重な検討に値するものであるから。